「生徒の視点からのカリキュラムマネジメントの検討」

―「学びをつなげる力」を通して―

村上　穂高
（京都教育大学附属特別支援学校）

A consideration of　“Curriculum management”
from the student’s viewpoint.
～Through an abilitiy to string “learning”together～

Hodaka Murakami

2018 年 11 月 30 日受理

抄録：本論文は、新学習指導要領において提示されたカリキュラムマネジメントの概念について整理するとともに、現状においてカリキュラムマネジメント研究および実践が教師主導の経験の構成という方向へ傾いているのではないかという問題意識のもと、生徒自身がどのように学校における諸処の学びをつなげ経験を構成しているのか、生徒自身の「学びをつなげる力」を A 特別支援学校高等部 3 年生の生徒の運動会での事例を基に考察した。今後の課題としては、教師のカリキュラムマネジメントと生徒の「学びをつなげる力」をどのように相互作用させていくのか、より発展的なカリキュラムマネジメントの実践例が求められる。

キーワード：カリキュラムマネジメント

Ⅰ．研究の背景と目的

1.　カリキュラムマネジメントの現状

平成２９年３月３１日に新学習指導要領が公示され、平成３０年４月１日から順次試行となる中で「カリキュラムマネジメント」の必要性が提示された。カリキュラムマネジメントについては、「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進」として，教科等横断的な学習の充実、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の改善、教育内容や時間の配分及び、必要な人的・物的体制の確保などを通しての教育活動の質の向上といった取り組みを連動させ学習の効果の最大化を図るものとして解説されている。「特別支援学校教育要領　学習指導要領解説」[1)]

この総則の趣旨を田村学は①カリキュラムデザイン　教科横断的な視点、②ＰＤＣＡサイクル　教育課程の編成、実施、評価、③内外リソースの活用　人的、物的資源の活用、として整理している[2)]。PDCA サイクルなどこれまでにも取り組まれてきた授業改善という指導者からの視点と、内外リソースの活用などの学校経営の側からの視点をカリキュラムマネジメントという概念で一体的な学校改善の取り組みとして提示した点に新しい意味があるといえる。

カリキュラムマネジメントについて比較的早くから研究を進めている田村知子は、カリキュラムマネジメントのモデルを既に提示している[3)]。田村のカリキュラムマネジメントのモデルは、システム思考を参考にしており、学校をとりまく諸機能の全体像を示している。ここでは、組織文化をその構造の中に入れ込むなどカリキュラムマネジメントを学校の営みの全体像を把握し、俯瞰するためのツールとして提示されている。

また、田村学は、「つなぐ」という言葉をキーワードに、生活科での体験と教科学習での言語活動をつなぐというように各教科と総合的な学習や生活科などでの体験を関連づけ効果を高めるという視点からカリキュラムマネジメントを提示している[4)]。

2. 現状からの問題点

＜生徒の側からの視点の必要性＞

田村知子のカリキュラムマネジメントのモデルは学校の営み全体を俯瞰し調整する、或いはレバレッジポイント[注1)]を見つけるという意味では有効ではあるが、生徒の視点から学校生活がどのように営まれているのか、という視点は存在しておらず、マネジメントの担い手はあくまでも教師である。いわば「潜在的カリキュラム」[注2)]のように、教師の教育計画などの想像を超えて生徒が実際にどのように学校での学びを経験しているのか、という視点は存在しない。田村学の「つなぐ」という視点からのカリキュラムマネジメントは、総合的な学習の時間を体験の時間とし、同時期に行われる他の教科で体験を言語化する学習を設定するなど、総合的な学習の時間と各教科の役割の構造化が行われている。こういった構造化は教師の側から整理されているように見えるが、小学校での生活科での「あそび場づくり」の実践例では、生徒へ期待する姿、実際の生徒の様子をもとに当初の単元計画を超えて生徒と教師が相互作用的に生活科の授業を年間を通して創造していく姿が紹介されている[5)]。ただ、ここでの「生徒の視点」は、当該授業においての生徒の姿から思いを教師がくみ取りながらカリキュラムを変化させていくという視点であり、生徒自身がどのようにカリキュラムを構造化していくのか、生徒自身が経験をつなぐ力そのものを対象にとりあげた例ではない。

＜生徒が経験をつなげる力＞

発達心理学者ピーター・グレイは、アメリカのマサチューセッツ州のサドベリー・バレー・スクールの実践を紹介し、特定の定められたカリキュラムを持たないこの学校で、生徒自身が自ら学びを構成していくという姿を提示している[6)]。また、赤木はアメリカのシラキュースの私立小学校の NewSchool で自らの娘が学校での学びに参加していく様子を伝えている[7)]。ここでは、個人に応じて作成された個別の学習計画表を教師が作成するが、教師が主導して学習内容を厳格に定め実施していくのではなく、英語が未熟な生徒の為に生徒の得意な「折り紙」の時間を設け、仲間に行為レベルでコミュニケーションができる機会を設定するなど、生徒同士が異年齢集団において関わりながら、学習の内容を深めていく様子が描かれている。いずれの事例においても、生徒が自ら学びを構成していく姿を事例として伝えている。アメリカの私立学校は日本の学校教育とは大きく乖離しており単純な比較は困難であるが、これらの報告から想像できるのは、生徒自身が学校での経験を作っていこうとする意欲の存在であり経験をつなげて意味を見出そうという姿である。

＜教師のカリキュラム観＞

カリキュラムをどのように捉えるのかという日米のカリキュラム観の比較研究において、佐藤学は、アメリカにおいて「教育経験の総体」として定義された「カリキュラム」という語が我が国の現場の教師の実感としては、学習指導要領などの公的に制度化された「教育課程」として捉えられる傾向があり、具体的には「年次計画」「指導計画」「時間割」といった授業に先立った「計画」のみを対象として意識されている実態を指摘している。そういった固定化され制度化されたカリキュラム観からは、教える側の視点のみで構成されるカリキュラムの発想や教えた事と生徒の学んだ事柄を同一視するというように、教師の意図を超えた生徒の学び、学校でおこる個性的で多義的な生徒の学びを見落とす結果を産んできたとしている。そして、教師と生徒の創造的な活動から生成し、発展するカリキュラムの在り方を主張している[8)]。

カリキュラムマネジメントを進めるにあたっては、教師自身がカリキュラムを固定化され制度化されたものとして捉えるのではなく、自らが構想し積極的に発展させるという意識を持つ事と、個々の生徒の持つ学習経験の意味や価値を理解し、学習目標を超えた生徒の学びを発見し受け入れるという意識の二つを持つ必要がある。

その点から現状のカリキュラムマネジメントに関する研究・実践を振り返ってみた時に、結果として教師の側からの経験の構成に傾いている可能性を指摘できる。その意味では、もう一方のカリキュラムの構成主体である生徒自身がどのように学校での各授業での学びをつなげ、自分なりの意味を見出し価値ある経験として位置づけているのかという事例が現状以上に求められるのではないかと考える。生徒自身が受動的にカリキュラムを受け入れる存在ではなく、能動的に学びをつなげ、経験を構成する主体であることを A 特別支援学校における高等部の生徒Ｓ君（知的障害を伴う自閉症生徒、現在高等部３年生）の事例にて示したい。また、生徒の視点を活かしたカリキュラムマネジメントの在り方について次章より検討したい。

Ⅱ． 生徒の視点からのカリキュラムマネジメントの在り方について

１　高等部３年生Ｓ君の事例

＜背景＞

S 君は高等部 3 年生の自閉症の生徒である。知的障害をもってはいるが、クラスの中では会話もよくでき、リーダー的な存在である。S 君は、自ら生徒会での活動へ立候補したり、作業班でもリーダー的な役割を担うなど積極的に学校生活でも目立った役割をになっており、言動からも自らに自信を持っているようなそぶりが見受けられる。しかし、内実は、知的障害という障害を受け入れるうえでの劣等感であったり、将来に対する不安などが存在し、そういった不安の裏返しのような形で自らの力を誇示したり、あえて目立つ役割を担うことで自尊心を保とうとしているような面も感じられる。

エピソード　夏休みの職場実習

以上のようなＳ君の様子に変化が訪れたのは、高 3 の夏の職場実習でのことであった。これまでの 1 日限定のクラス集団で行く職場見学では、タオルたたみなどの単調な仕事に対し、耐えきれずに不平をいったりする場面があり、それを振り返りの中で反省しつつも、働くことそのものへの自信の喪失、将来への不安が彼の中には存在していた。夏の実習ではそういった現状を踏まえて、彼の力、特に体力が発揮できる場面として A 施設内での清掃の実習を提案した。そこは彼の一つ上の A 君が働いている職場でもある。A 君は彼が以前に運動会で常に接戦を演じていた先輩であり、唯一彼が憧れる先輩でもあった。そういった先輩の存在も支えとなり、S 君は実習を受け入れる事となる。

実習は夏の暑い時期に行われ、体力面もきつい作業であったが、見学した担任が一番気になったのは、先輩や指導員の方（これは彼が高１の時の中学部の主事であり、彼とも面識がある方である）からの指導にどこまで彼が耐えられるかという点であった。窓の拭き方、道具の手入れの仕方など、担任が見学に行っている間にも数分に一度は指導が入る。それを彼が受け入れられるのか、担任としては不安な心境で見学していた。しかし、2 週間の実習を通して、彼は先輩に対しては丁寧な敬語を使い、指導員の方に対しては常に言われた事を受け入れ、自分の作業を改善していた姿が報告された。実習の反省では、「行く前は働くことに不安があったみたいだけれどいまはどうか？」という担任からの質問に、Ｓ君は、「憧れの先輩や、知っている先生が指導員で安心して働けた。働くことについてもっと（前向きに）考えたい」という言葉が聞けた。Ｓ君にとっては、自分が安心できる場という条件があれば働けるという一つの自信につながったようである。

担任の計画した学習活動

この経験は彼にとっては、学校生活のターニングポイントとなったようで、実習から帰って来た彼の表情や態度が以前とは別人になっているのに担任も気がついた。クラスでの総合的な学習における実習報告会において、彼が実習後の反省会で担当の職員の方から伝えられた「自分のペースではなく、求められたペースで作業をする」ということを作業学習でも行っていくことを彼はクラスのみんなの前で発表した。そのような体験（学び）を作業Ⅰ、生活、作業Ⅱ[注3)]などの授業での学びとつながるように計画した。

担任の意図した授業での学びのつながり
①作業Ⅰでの学習とつなげる
・指導者や仲間の話をよく聞いて受け入れ行動する
・周囲の作業ペースに合わせて作業をする
②作業Ⅱでの学習とつなげる
・挨拶や返事、丁寧な受けごたえなどに気をつける
・周囲の作業のペースに合わせて作業をする
③生活の授業とつなげる
・将来の生活への自信を深め、調理技術を意欲的に身につける

担任が意図した同時期に行っている他の授業との学びのつながりは以上のような内容であったが、そういった狙いは少しずつ２学期のＳ君の授業へと活きてきた。実習報告会を終えた後の作業Ⅰの学習では、以前では気分の乗らないときにはため息をつくこともあったＳ君が「さあ、みんな行こう」と積極的に声をかける姿が見られた。また、以前では作業中の指導者の指示にすぐには従いにくい場面もあったが、「はい、わかりました」と答えながら熱心に聞き、指示の意味を考えようとする姿が見られるようになった。また、作業Ⅱの時間では以前では、作業の様子を見に来た筆者に目で応じながらもはっきりとした挨拶がでなかったが、「おはようございます」と誰よりも大きな声で挨拶をするＳ君の姿が見られるようになったのである。しかし、Ｓ君にとってこの体験は担任の想像以上に大きな意味を持っていた様子で、実習での学びを他の学校場面でも自ら関連させていくこととなる。以下に記すのは、そういったＳ君の様子を示すエピソードである。

エピソード２　運動会

Ｓ君は走ることが得意であり、過去の運動会では、常に 100m などの種目で１位をとっている。ただ、負けたくない、或いは負けれない（自分の自信のよりどころとして）という思いが強く、過去のリレーの練習場面では、バトンを投げだす生徒や、遅くて抜かれる生徒がいた時には、感情を抑えきれず激こうする場面もあった。
運動会を目前に控えた練習の日、リレーの練習の際に、後輩の女の子がレース中に走れなくなる場面があった。

これは、女の子が相手の子に抜かされたことがショックだったことが原因で走ることを止めたようであるが、結果としてＳ君のグループは取り返せないほど大きく引き離されてしまう事となる。Ｓ君が感情的になるのではないかと心配していた担任であるが、「リレーの練習、どうだった？」という担任の質問に対し、予想に反してＳ君は、明るい表情で練習後に担任にこう語った。「レースは抜いたり抜かれたりするもの。抜かれるからこそ面白い」「この運動会の目標は楽しむこと、冷静に気持ちを落ち着けてやりたい」「昔みたいに怒っていたら将来の進路先には進めない。将来の為にも冷静にやりとげる練習をする」というものだった。そして、走れなくなった後輩の女子生徒に、「大丈夫だよ、次頑張ろう」と言葉がけをしているＳ君の姿があった。

感想文での指導

運動会の感想文を書く時間、Ｓ君ははりきって作文を書いていったが、内容としては、
「僕が１番でゴールしました」というように自分が中心の内容に偏っていた。担任は、「今回の目標をまず書いてみよう。そして、将来の自分の姿から今回の運動会はどうだったかを考えてみよう」とＳ君に語りかけた。その結果、Ｓ君の作文には、「優勝はできなかったけど、焦らずに冷静にできてよかったです」「来年は後輩達の活躍を応援したいです」という内容が加わった。

２　分析

＜学びをつなげる力＞

この二つのエピソードからは、当初、担任が意図していた複数の単元や授業の中での学びのつながりとは別の視点から自らの学習経験をつなげようとするＳ君の姿が見える。担任は実習での働く体験は、同じように作業を行う授業である作業Ⅰや作業Ⅱの時間での学びにつながることだと考えていた。（表 1）

しかし、エピソードを見るとＳ君自身が「実習での学び」－「運動会」―「将来の進路」をつなげて考えている事がわかる。（表２）運動会は単に身に付けた身体能力や技術を発揮する場ではない。これまでの経験から育ってきた集団性や他者への思いやりが表出される場でもある。しかし、実習の学びがこのように運動会に現れ、そして将来にむけての見通しと関連づけられるというのは、担任（教師）の視点からは無かった事である。

Ｓ君がどのように学校生活を体験しているのかは想像するしかないが、彼にとっては、１年に一度自分が全校生徒の前で活躍できる運動会という行事は学校生活の中心的な場だったと考えられる。そのように彼にとって特別な意味を持つ場であったからこそ＜これまでの自分―実習での自分―これからのなりたい自分＞を関連付けたのだと考えられる。ここで重要なのは、Ｓ君が自ら将来の自分の姿と関連させながら経験を構造化していた点である。それを可能にしたのはＳ君の物の見方が完全に変化するような核となる体験（職場実習）である。ここには、担任（教師）の視点からみた授業のつながりとＳ君（生徒）の視点からみた授業のつながりとの間のズレがあるが、結果として担任（教師）が意図した以上の豊かな関連付けをＳ君自身が行う姿が見られる。（図１を参照）

Ⅲ. 全体考察と今後の課題

1 全体考察.

この事例から想像できる事は、生徒自身が体験での学びをつなげ、自分にとって「意味のある経験」として構成し意味づけるという「学びをつなげる力」の存在である。そういった力によってうまれた学びのつながりこそが、教師が年間の単元表を見ながら発想したカリキュラムマネジメントをまさに生きたものへと変える力となる。また、事例において担任（教師）の果たした役割は、S 君が運動会を特別な場と捉えているという彼の考えに気づき、本人の言葉を受け入れながら、作文の指導などを通じて、本人の変化を言語化することであった。言語化することで、S 君の中で意識にのぼりつつあった学びのつながりをより明確にして「意味のある経験」として彼の中に位置付けたといえる。

カリキュラムマネジメントを考えるとき、教師の側からの経験の構成と生徒の側からの経験の構成があり、表立って見えやすい部分が教師の側からの構成であるならば、従来のカリキュラムマネジメント研究において陰に没していたのが後者であろう。両者が互いに響きあうことで結果として個々の生徒の経験の総体としてのカリキュラムは充実を迎える。教師の側が生徒の経験を構成するという意図を持って取り組む事と同時に、生徒の側からの経験の構成の在り方に目をむけ、それを育むことによって個々の生徒にとって経験の総体としてのカリキュラムが充実を迎えるといえる。

＜教師のカリキュラム観＞

S 君が自身で学びをつなげ経験を構成する姿を捉えることができたのは、筆者自身がカリキュラムを制度的なもの、固定化されたものとして捉えるカリキュラム観ではなく教師と生徒の相互作用のもとで作り挙げる「経験の総体」としてのカリキュラム観を踏まえて実践に臨んでいたことが一つの要因として考えられる。そういったカリキュラム観を持たない場合はＳ君の「学びをつなげる力」を見落としていた可能性が高い。教師自身がどのようなカリキュラム観を持ってのぞむのかがカリキュラムマネジメントにおいても大切な要素であるといえる。図１カリキュラムマネジメントの在り方　）

2 課題

今回の事例ではＳ君が自らの経験をつなげていき、それをＳ君の「学びをつなげる力」として論じた。しかし、そういった生徒の力を生み出す背景として教師がどのように働きかけを行うべきか、どのような支援や学びの場を用意していけるのかについては検討が不十分であった。また、生徒の側からの経験の構成と教師の側からの経験の構成をどのように調和させ、より効果的なカリキュラムマネジメントとして機能させるのかという点についても今後の課題としたい。

表１：当初の単元計画と単元どうしのつながり（出典：筆者作成）

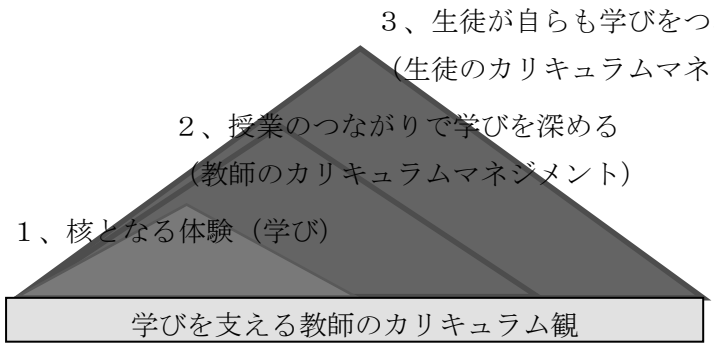
	夏休み		２学期			
	７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月
生活				『学校祭バザーにむけて、メニューづくり ・学校祭で喜ばれるメニューを考える ・将来にむけてご飯をつかった調理をみにつける	調理 ・将来にむけて自分で作れるメニューを増やす ・レシピをみながら調理をできるようになる ・切り方、炒め方などを考え、できるようになる	
作業Ⅰ			『稲の干し場づくり』『花壇の整備』 ・仲間や教師と相談、報告しながら作業をすすめる ・作業の必要性を理解し、人の役に立つという意識をもって取り組む ・これまでの経験をいかして主体的にとりくむ		『脱穀・精米』『環境整備』 ・仲間や教師と相談、報告しながら作業をすすめる ・作業の必要性を理解し、人の役に立つという意識をもって取り組む ・これまでの経験をいかして主体的にとりくむ	
作業Ⅱ （木工班）			学校祭バザーに向けて ・喜ばれる商品について考え、試作する ・互いに協力・確認しながら作業をすすめる ・質の高い基準の製品を目指して思考しながら作業をする ・挨拶、報告などを身につける		作業Ⅱ月間 ・将来の働く生活について意識できるようになる ・質の高い製品を目指して試行して作業をする	
総合的な学習	雇用にむけた実習 ・１週間の実習を通して将来の生活についての見通しを持つ ・実習の中で自分の長所、課題を見つめ、今後の学校生活の目標を考える		実習報告会 ・自分の実習経験を振り返り、今後の学校生活にいかす ・仲間の実習経験を聞き、様々な働き方を知る	進路相談にむけて ・学校生活の目標を確認する ・権利・義務について知る ・将来についての自分の意思をかためる	後期進路相談 ・自分の将来について意思を伝える ・自分を支える人がいることを理解する ・これからの進路について理解する	
体育		運動会にむけて ・各種競技の練習 ・運動会への見通しと意欲を高める				
音楽						
美術						
学校行事			運動会		学校祭	

表２　本人が学びをつなげた単元票（出典：筆者作成）

	夏休み		２学期			
	７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月
生活				『学校祭バザーにむけて、メニューづくり ・学校祭で喜ばれるメニューを考える ・将来にむけてご飯をつかった調理をみにつける	調理 ・将来にむけて自分で作れるメニューを増やす ・レシピをみながら調理をできるようになる ・切り方、炒め方などを考え、できるようになる	
作業Ⅰ			『稲の干し場づくり』『花壇の整備』 ・仲間や教師と相談、報告しながら作業をすすめる ・作業の必要性を理解し、人の役に立つという意識をもって取り組む ・これまでの経験をいかして主体的にとりくむ		『脱穀・精米』『環境整備』 ・仲間や教師と相談、報告しながら作業をすすめる ・作業の必要性を理解し、人の役に立つという意識をもって取り組む ・これまでの経験をいかして主体的にとりくむ	
作業Ⅱ （木工班）			学校祭バザーに向けて ・喜ばれる商品について考え、試作する ・互いに協力・確認しながら作業をすすめる ・質の高い基準の製品を目指して思考しながら作業をする ・挨拶、報告などを身につける		作業Ⅱ月間 ・将来の働く生活について意識できるようになる ・質の高い製品を目指して試行して作業をする	
総合的な学習	雇用にむけた実習 ・１週間の実習を通して将来の生活についての見通しを持つ ・実習の中で自分の長所、課題を見つめ、今後の学校生活の目標を考える		実習報告会 ・自分の実習経験を振り返り、今後の学校生活にいかす ・仲間の実習経験を聞き、様々な働き方を知る	進路相談にむけて ・学校生活の目標を確認する ・権利・義務について知る ・将来についての自分の意思をかためる	後期進路相談 ・自分の将来について意思を伝える ・自分を支える人がいることを理解する ・これからの進路について理解する	
体育		運動会にむけて ・各種競技の練習 ・運動会への見通しと意欲を高める				
音楽						
美術						
学校行事			運動会		学校祭	

将来の生活　目指したい姿

図１　カリキュラムマネジメントの在り方　〈豊かに膨らむ経験〉（出典：筆者作成）



注

１）レバレッジ、「てこ」の意で、総じてシステム全体に期待する効果を与えるために効果的なポイントの意味。

２）教師、教育制度の意図していない、知識や意識が生徒たちに現れること。ここでは、教師の意図と想像をを超えて実際に生徒が体感した経験を表す言葉として例えている。

３）本校において高等部の生活単元学習のうち作業Ⅰは屋外活動を中心に、生活は生活経験を広げる学習を主に屋内で、作業Ⅱの学習は高等部３学年の縦割りの作業学習として設定している。

参考文献

1）特別支援学校教育要領　学習指導要領解説　総則編　第１章 教育課程の基準 の改善の趣旨）

２）田村学　2017　「カリキュラムマネジメント入門」東洋館出版社

３）田村知子　2011　「実践カリキュラムマネジメント」ぎょうせい

４）田村学　2017　前掲書　53～73 頁

５）田村学　2017　前掲書　53～73 頁

６）ピーター・グレイ　2018「学びが遊びに欠かせないわけ」築地書館

７）赤城和重　2017「アメリカの教室に入ってみた」ひとなる書房

８）佐藤学　1996　「カリキュラムの批評-公共性の再構築へ一」世織書房